

# ユメ十夜

2006(平成18)年12月14日鑑賞(角川ヘラルド試写室)



プロデューサー=角田豊/原作=夏目漱石『夢十夜』(新潮文庫刊)/第一夜監督=実相寺昭雄/出演=小泉今日子/松尾スズキ/第二夜監督=市川崑/出演=うじきつよし/中村梅之助/第三夜監督・脚本=清水崇/出演=堀部圭亮/香椎由宇/第四夜監督=清水厚/出演=山本耕史/菅野莉央/第五夜監督・脚本=豊島圭介/出演=市川実日子/大倉孝二/第六夜監督・脚本=松尾スズキ/出演=阿部サダヲ/TOZAWA/石原良純/第七夜監督=天野喜孝、河原真明/声の出演=Sascha/秀島史香/第八夜監督・脚本=山下敦弘/出演=藤岡弘、山本浩司/第九夜監督・脚本=西川美和/出演=緒川たまき/ピエール瀧/第十夜監督・脚本=山口雄大/出演=松山ケンイチ/本上まなみ/石坂浩二/プロローグ&エピローグ監督=清水厚/出演=戸田恵梨香(日活配給/2006年日本映画/110分)

## 第7章

たまには変わった趣向で

……夏目漱石の異色の短編小説『夢十夜』を、「同じ製作費」という条件で新旧10人の監督が競争！と期待したが、やはり10分の短編ではどれもマイマイチ……？ また、ケッタイな化け物の登場やくだらないギャグの連発にはうんざり……。もっとも、こういうのがお好みの方はご随意に……。

### 知らなかったナア……

この映画の原作は、夏目漱石が明治41(1908)年、41歳の時に発表した異色の短編小説『夢十夜』。これはプレスシートによれば、『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』といった今までの漱石作品とは一線を画し、「知る人ぞ知る人気を誇っている」とのことだが、残念ながら私は知らなかったナア……？

プレスシートによれば、その『夢十夜』については、夏目漱石大好き人間(?)のプロデューサー角田豊氏が、20歳代の時に「テレビ用シリーズ企画として『夏目漱石・原作連続映像化』を会社に提案したが一笑に付され終了」、そして「40代の今、雑談の中から『夢十夜』の映画化ばなしになった」とのこと。そこで角田プロデューサーの頭に浮かんだキーワードは、「100年前の挑戦状」であり、「それに挑む10人の監督」というもの。そこで実現したのが表記のとおり、

老若男女、ベテラン若手10人の監督が、それぞれの視点と感性を競い合いながら約10分の短編にまとめて『夢十夜』を描くという本作。面白い企画だが、さて……？

## 短編映画の良し悪しは……？

10人に1作ずつ監督してもらうについての条件は、「製作費はみんな同じ」ということだけ。したがって、2005年3月から始まった撮影では、撮影期間の長短にはかなりバラつきがあったよう……。長編作には普通しっかりしたストーリー構成があるものだが、10分の短編映画になると、ストーリーよりも1つのポイントに集中した感性キラリの作品が求められることになる……。そのため、ややもすれば抽象的な描き方になりがちだが、私は基本的にそんな短編映画は苦手……。

## 子だくさんの漱石だが……

夏目漱石は意外に子だくさんで7人の子供がいたとのこと。したがって第三夜に登場する、騒々しい子供たちの声の中で執筆がはかどらない漱石の姿は本当の話……。6人目の子供を身ごもっている妻が語る、地蔵の首についての奇妙な話を軸に展開される物語は、Jホラーの旗手清水崇が丹精こめて監督しているだけにかなり不気味。とりわけ、漱石が背中に背負って歩く子供の顔の恐いこと……。最初の子供を流産で失ったり、末っ子が1歳半ばで急死したことから、ひょっとして漱石の深層心理には、子供について大きな悩みがあったのかも……？

## 見事なアニメーションダンスだが……

第六夜は仁王像<sup>かしら</sup>の頭を彫るという運慶を見物するために、多くの人々が集まってくるという物語だが、運慶がそこで踊るのがアニメーションダンスというものらしい……。たしかに、リズムカルなその踊りは見事だが、それに調子を合わせる観客たちのバカさ加減と、木に斧をたたき込むと木が割れてその中から仁王様の顔が飛び出してくるというトリックのくだらなさとうんざり……。さらにそれを見物した男が自分の家に帰って同じやり方で試してみると……？

あんなにまじめそうな顔をした夏目漱石って(?)は、ホントにこんなバカみたいな夢を見ていたの……。そして、こんなモノを理解するのに100年もかか

るとホントに漱石は予言していたの……？

## 化け物やギャグを売りにするのは……？

2006年11月29日に亡くなった実相寺昭雄の第一夜や『犬神家の一族』（06年）で今なお活躍中の市川崑の第二夜は、抽象的な内容ながら、いかにも夢物語らしくかつ白黒画面での重厚なつくりの魅力が……。しかし、第五夜に登場する天探女あまのじゃくは、観客によってはユーモラスに見えるらしいが、化け物嫌いの私は結局目を伏せたまま1度もこれを見ず終いに……。また、第八夜における10mを超える巨大な生物、そして第十夜における豚丼製造風景や本上まなみがブタに変身するナンセンスなシーンを観ていると、ナンセンスギャグの連続にうんざり……。

## スポット出演だけの一流俳優も……

10人の監督による10分の短編映画には、一流俳優がたくさん登場する。第一夜の小泉今日子、第三夜の香椎由宇、第九夜の緒川たまきなどの女優陣、そして第四夜の山本耕史、第六夜の阿部サダヲ、第十夜の松山ケンイチなどはそれぞれそれなりの熱演……。しかし、第六夜の石原良純、第八夜の藤岡弘、第十夜の石坂浩二などはほんのワンシーンだけのスポット出演……。これでは一人前の出演陣として名を連ねるのは少しインチキっぽいのでは……？

## どうせなら観客に採点してもらったら……

漱石からの「100年目の挑戦状」ともいべき十夜の夢を10人の個性豊かな監督が競い合って作ったのだから、10人の監督だってどの作品が評価されるのか大いに意識しているはず……。もちろんそれを真正面から言い出すことはないだろうが、その出来の良し悪しを観客に採点してもらってその結果を発表したらどうだろうか……。もっとも素人だけでは本当の良し悪しが判断できないかもしれないので、もう一方では映画評論の専門家たちの採点も……。

なお、最終的な審査委員長はもちろん、そのために100年後の世界によみがえってきた夏目漱石その人……。そんなことを考えていると、番外編の『第十一夜』の物語ができそうだが……。

2006(平成18)年12月16日記